

知的障害や発達障害のある子供に対する言語獲得のための支援

松山 郁夫

Support to Promote on the Language Acquisition for Children with Intellectual Disabilities and Developmental Disorders

Ikuo MATSUYAMA

【要約】1歳半未満の発達段階にある子供の発達を促すのに要する言語獲得に関係の深い働きと、それらに応じた言語獲得に必要な働きかけについて、子供の言語発達を中心に論じている文献の知見から検討した。その結果、他者と意思や気持ちを通じ合わせるためには、共感性・疎通性、行為による対話、体験を思い浮かべて再現する表象能力を育てるためには、模倣を楽しむこととイメージを表現する遊びを楽しむ重要性等が考察された。

【キーワード】知的障害、発達障害、言語獲得、発達段階、太田ステージ評価

I. はじめに

遠城寺式・乳幼児分析的発達検査は、障害児の早期療育等で長期にわたって使用されている発達検査である。この発達検査は簡便かつ有用であり、精神発達や言語発達をみるには、粗大運動、手の運動、基本的習慣の領域は行わず、対人関係、発語、言語理解の3つの領域のチェックをすればよい(諸岡,2005)と言及されている。0歳0か月から1歳8か月までの「言語」の項目については、表1の通り(遠城寺,1977)であり、言語理解と発語は関連しながら発達していくことが窺える。

言語理解については聴覚機能の発達を要するため、聴覚機能を育てる働きかけも必要になる。具体的には、「人の声や快い音に耳を傾けるように促すこと」、「呼びかけに振り向いたり音のする方向に振り向いたりするような、音のする方向を見つける遊びをすること」、「人の声、いろいろな玩具の音、楽器の音、掃除機や洗濯機など生活の中における様々な音を聞かせて、音を聞き分けることができるようにすること」等の周囲の働きかけが必要である。

発語の基礎となる口腔機能の発達を促すには、「食事をゆっくりととるようにして、唇で食物や飲み物を取り込む、噛み砕く、舌を上手に使うて噛み砕いたものを丸めこむ、飲み込む(嚥下)に至る一連の口腔機能に関する能力」を高めることが求められる。また、遊びの中で、「玩具をしゃぶったり噛んだりすること、ラップを吹くこと、吹くことを加減しながらしゃぼん玉を作ること」等、口腔を調節して使う体験を十分にさせる配慮も大切である。

1歳半までの言語発達から、語りかけている人に子供の注意を向けさせ、常に人からの語りかけが子供にとって快いものになるように心がけると共に、子供からの発声にも笑顔で応じたり、声のかわしい、喃語のやりとりを楽しんだりする必要があるといえる。さらに、子供の興味や関心にそって話しかけるように配慮し、単語や二語文で短く繰り返すことで、言葉の意味が理解しやすくなると考えられる。

これらのことから、遠城寺式・乳幼児分析的発達検査の「言語」の言語理解と発語の項目をチェックすれば、言語獲得に関する働きかけについてある程度考えることができる。それ故、この検査を部分的に活用すれば、言語獲得を目指した働きかけをある程度案出することができよう。

しかしながら、重度知的障害や自閉スペクトラム症等発達障害によって言語発達が滞っている子供の言語獲得を目指し、発達を促すためには対人関係、発語、言語理解の領域よりもより広く言語発達に関連する領域に目を向けなければならない。以前より、訓練と称してコミュニケーション技能だけを学習させようとしても、それを支える基礎学習として、日常生活の中での生きた学習を位置付けないと十分な成果が期待できない（中島,1991）との指摘がなされている。このため、言語獲得に関係の深い働きと言語獲得のための働きかけを明らかにする必要がある。したがって、本研究の目的は、1歳半未満の発達段階にある子供の言語獲得に関係の深い働きと言語獲得に必要な働きかけについて考察することである。

表 1 遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表における「言語」の項目（0歳0か月～1歳8か月）

発 語	言語理解
(0:0)「元気な声で泣く」	(0:0)「大きな音に反応する」
(0:1)「いろいろな泣き声を出す」	
(0:2)「泣かずに声を出す」	(0:2)「人の声でしずまる」
(0:3)「声を出して笑う」	
(0:4)「キャーキャーいう」	(0:4)「母の声と他の人の声をききわける」
(0:5)「人に向かって声を出す」	
(0:6)「おもちゃなどに向かって声を出す」	(0:6)「親の話し方で感情をききわける」
(0:7)「マ、バ、パなどの音声が出る」	
(0:8)「タ、ダ、チャなどの音声が出る」	
(0:9)「さかんにおしゃべりをする（喃語）」	(0:9)「「いけません」と言うと、ちょっと手をひっこめる」
(0:10)「音声をまねようとする」	(0:10)「「バイバイ」や「さようなら」のことに反応する」
(0:11)「ことばを1～2語、正しくまねる」	(0:11)「要求を理解する」(1/3)
(1:0～1:1)「2語言える」	(1:0～1:1)「要求を理解する」(3/3)
(1:2～1:3)「3語言える」	(1:2～1:3)「簡単な命令を実行する」
(1:4～1:5)「絵本を見てひとつのものの名前を言う」	(1:4～1:5)「絵本を読んでもらいたがる」
(1:6～1:8)「絵本を見て三つのものの名前を言う」	(1:6～1:8)「目、口、耳、手、足、腹を指示する」(4/6)

※出典：遠城寺式・乳幼児分析的発達診断検査表（九大小児科改訂版）（1977）慶應義塾大学出版会

II 研究方法

知的障害や自閉スペクトラム症等の発達障害があると、言語発達に遅れが認められることが多い。その場合、上記の言語理解と発語に関する言語発達だけでなく、言語獲得に関係の深い働きにも目を向けながら働きかけることが求められる。

子供の言語獲得を促すためには発達段階を正確に捉えて、それに合わせた配慮をする必要がある。

シンボル表象機能の発達段階をみる評価法である「太田ステージ評価」では、発達段階を把握した上で、適切な認知発達治療ができるようになっている。その評価では、「改定言語解読テスト (LDT-R)」による具体的な操作基準を使用して、Stage I, II, III-1, III-2, IV, V以上の6段階に分けられ、各発達段階の課題が設定されている。つまり、言語獲得に関係の深い働きと言語獲得に必要な働きかけが提示されているため、発達段階に応じた全体的な発達を促すことができる仕組みになっている。

以上のことを踏まえて、まず、言語獲得に関係の深い働きに着目した文献(表2)から、言語獲得に関係の深い働きを抽出した。言語理解と発語の発達に焦点をあてるだけでは、知的障害や自閉スペクトラム症等の発達障害によって言語発達が滞っている子供に対する言語獲得に必要な働きかけを明らかにできないため、言語獲得に関係する働きについて広く捉えるように努めた。その際、複数の文献で論述されているもののみとした。次に、抽出された言語獲得に関係の深い働きに応じた言語獲得に必要な働きかけを考案した。さらに、それらの意味内容が、太田ステージ(Stage I)と同様の知見を意味しているのかを検討した。

表2 言語獲得や言語発達に関係の深い働きに着目した文献

著者・発行年・題名・出版社
村井潤一(1977) 発達の理論—発達と教育・その基本問題を考える. ミネルヴァ書房.
T.G.R.バウアー(訳:岡本夏木)(1979) 乳児の世界—認識の発生・その科学. ミネルヴァ書房.
T.G.R.バウアー(訳:岡本夏木)(1980) 乳児期—可能性を生きる. ミネルヴァ書房.
野村庄吾(1980) 乳幼児の世界—こころの発達. (岩波新書). 岩波書店.
岡本夏木(1982) 子どもとことば. (岩波新書). 岩波書店.
岡本夏木(1985) ことばと発達. (岩波新書). 岩波書店.
若林慎一郎・西村辨作(1988) 自閉症児の言語治療. 岩崎学術出版社
無藤隆・田島信元・高橋恵子編(1990) 乳児・幼児・児童(発達心理学入門). 東京大学出版会.
Margaret Harris(1992) Language Experience and Early Language Development. Routledge.
岡本夏木・浜田寿美男(1995) 発達心理学入門(子どもと教育). 岩波書店.
村井潤一・小山正(1995) 障害児発達学の基礎—障害児の発達と教育. 培風館.
野村庄吾(1996) 障害児教育入門(子どもと教育). 岩波書店.
堅田明義・梅谷忠勇編著(1998) 知的障害児の発達と認知・行動. 田研出版.
中島誠・村井潤一・岡本夏木(1999) ことばと認知の発達(シリーズ人間の発達). 東京大学出版会.
岩立志寿夫・小椋たみ子編著(2002) 言語発達とその支援. ミネルヴァ書房.
小山正・神土陽子編(2004) 自閉症スペクトラムの子どもの言語・象徴機能の発達. ナカニシヤ出版.
岡本夏木(2005) 幼児期—子どもは世界をどうつかむか(岩波新書). 岩波書店.
小林春美・佐々木正人編著(2008) 新・子どもたちの言語獲得. 大修館書店.
小椋たみ子・小山正・水野久美(2015) 乳幼児期のことばの発達とその遅れ:保育・発達を学ぶ人のための基礎知識. ミネルヴァ書房.
杉崎鉦司(2015) はじめての言語獲得—普遍文法に基づくアプローチ. 岩波書店.
臨床発達心理士認定運営機構(監修)・秦野悦子・高橋登編(2017) 言語発達とその支援(講座・臨床発達心理学). ミネルヴァ書房.
臨床発達心理士認定運営機構(監修)・本郷一夫・田爪宏二編集(2018) 認知発達とその支援(講座・臨床発達心理学). ミネルヴァ書房.
小山正(2018) 言語発達. ナカニシヤ出版.

早瀬尚子編著 (2018) 言語の認知とコミュニケーション—意味論・語用論, 認知言語学, 社会言語学(言語研究と言語学の進展シリーズ 2). 開拓社.

Margaret Harris, Gert Westermann (訳: 小山正・松下淑) (2019) 発達心理学ガイドブック—子どもの発達理解のために. 明石書店.

III 結果

表 2 の文献における言語獲得に関係の深い働きを検討すると, 多くの要素があったが, 表 3 のように分類することができた。これにより, 子供の言語獲得に不可欠な関係の深い働きと, それらに応じた言語獲得のための働きかけが示された。

表 3 に示した通り, ①他者と意思や気持ちを通じ合わせることができるようになるためには, 共感性・疎通性, 行為による対話 (やりとり・やりとり遊び), ②物事の意味を理解することができるようになってくるには, 状況を理解することと物の意味を理解すること, ③体験を思い浮かべて再現する表象能力を育てるためには, 模倣を楽しむこととイメージを表現する遊びを楽しむこと, ④動作を記号として使うようになってくるためには, 身振り言語と指さしの意味を理解して表現すること, これらの発達が必要になる。

太田ステージ評価における 0 歳から 1 歳半未満の発達段階にある Stage I は, 人への主な要求手段によって次の 3 つに分類され, Stage I -1 は「手段と目的の分化ができていない段階」, Stage I -2 は「手段と目的の分化の芽生えの段階」, Stage I -3 は「手段と目的の分化がはっきりと認められる段階」となっている。Stage I の認知発達治療の目標には, 「シンボル機能の芽生えを促す」, 「日常生活での基本的な適応行動を促す」, 「異常行動の予防と減弱を図る」の 3 点があげられている (太田・永井・武藤, 2015)。

Stage I の各重点課題, Stage I -1 では, 「各種感覚の発達および異種感覚の統合を促す」, Stage I -2 では, 「各種感覚の発達および異種感覚の統合を促す」, 「感覚運動的知能を養う」, 「対象指示活動の基礎をつくる」, 「物に名称のあることの理解の基礎をつくる」, Stage I -3 では, 「各種感覚の発達および異種感覚の統合を促す」, 「対象指示活動の基礎をつくる」, 「物に名称のあることの理解の基礎をつくる」, 「コミュニケーションの基礎を養う」となっている (表 4)。これらは, 表 3 に示した 1 歳半未満の発達段階にある子供の言語獲得に関係の深い働きと, 言語獲得のための働きかけと同様の知見を意味している。

以上より, 1 歳半未満の発達段階にある子供の言語理解と発語の発達を促すためには, 表 3 に記した言語獲得に関係の深い働きに着目して, 言語獲得のための働きかけを行う必要があると示唆された。

表 3 言語獲得に関係の深い働きと言語獲得のための働きかけ

言語獲得に関係の深い働き	言語獲得のための働きかけ
1.他者と意思や気持ちを通じ合わせることができるようになってくること (1)共感性・疎通性 ・他者の顔を見ると笑う・微笑む (1~3 か月) ・他者と目を合わせる (2~3 か月) ・他者と同じ物や人, 同じ方向を見る (4 か月) ・他者に対して自分から見つめたり笑いかけたり	(1) 他者と共感しながら, 気持ちを通じ合わせる力を育てる ・目を見て笑いかけたりあやしかけたりする ・親子で向かい合って遊ぶことで, 子供の笑顔や笑い声を引き出す

<p>して、他者との関係を求める（5～6 か月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・泣き声、喃語、表情、動作によって、他者に意思や気持ちを伝えようとする（8～9 か月） <p>(2) 行為による対話：やりとり・やりとり遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・他者が差し出したものに対して手を伸ばす(6 か月) ・はっきりと他者からものを受け取るようになり、受け手としての役割を果たす（7～8 か月） ・他者からの「ちょうだい」に応じてものを渡す・自分から差し出す等、渡し手としての役割を果たす（10 か月） ・自分から他者に対して「ちょうだい」と要求したり差し出したりして、役割交代をしながらやりとり遊びを楽しむ（1 歳） ・ボールの転がしあいやままごとでのやりとり等、他者との関係性を楽しむ社会的ゲームとしてのやりとり遊びが盛んになる（1 歳後半） 	<ul style="list-style-type: none"> ・追いかけてっこ等、心から笑いあう体験をする <p>※他者に向けて期待したり要求したりする力を育てるために、先取りしすぎないようにしながら子供の様子を見て適切に働きかける</p> <p>(2) やりとり遊びを楽しめるようにする</p> <p>※遊びとして喜びを感じ、自分から遊びを求めたり遊ぼうとしたりするように、笑顔で楽しく働きかけるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いないいないばー」等の動作や仕草によるやりとり ・「どうぞ」「ちょうだい」等の動作や仕草による物の受け渡し ・ボールの転がしあいやままごとにおける物のやりとり
<p>2.物事の意味を理解することができるようになってくること</p> <p>(1) 状況を理解すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周囲の人や物の動きを手がかりにして現在の状況を理解する（「もうすぐ〇〇だ」「今は△△のときだ」）⇒それを踏まえて、その状況に応じた行動をとったり期待したりする <p>例：手を差し伸べると抱っこしてもらえると理解できる（5～6 か月）・外出することや食事をする事が理解できる（9～10 か月）</p> <p>(2) 物の意味を理解すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物は時や場所が違ってても、変わらない一つの物であることだと理解する ・母親がわかる・人見知りをする（5～7 か月） ・お気に入りの玩具ができる（5～7 か月） ・目の前に物が見えなくても存在し続けていることを理解する ・目の前で隠した物を見つけようとする（8 か月） ・自分から遊びたい玩具等のものを探す（1 歳半） 	<p>(1) 状況を理解できるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・メリハリのある規則正しい生活を送る ・子供ができる範囲で場面や状況にあった行動をとれるように働きかける⇒特に、母親が子供に適切な働きかけをできるように支援する ・できる範囲で、自発的に行動できるように働きかける⇒「今は〇〇をするとき」「その次は△△をするとき」のように場面や状況の理解や見通しが育つように配慮する <p>(2) 物の意味の理解ができるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の目、耳、鼻、口、指等における身体感覚を活用して、物の性質や意味を理解していくように働きかける 例：「きれいな花だね。いい匂いがするよね。触ってみようかと誘ってみる」 ・宝探しのようにして、隠した玩具等の物を探したり見つけたりして遊ぶ <p>※周囲のいろいろな物に手を伸ばしていく探</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・スプーンは口，ブラシは頭，電話は耳にあてる等，物の意味や用途を理解してそれにあった取り扱いをするようになる（1歳） ・物を間接的手段，つまり道具として使うようになる（1歳半） 	<p>索活動を大切にする・見守る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スプーンは口に持っていく，靴は足に履く等，用途に合った物の扱いができるような働きかけをする ・クレヨンで描く，スプーンで食べる等，道具としての物の使い方ができるように働きかける
<p>3.体験を思い浮かべて再現する表象能力を育てること</p> <p>(1) 模倣を楽しむこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・微笑み（笑顔）や喃語を一緒に交わして楽しむ（3～4か月） ・「いないいないばー」で声をかけ合う等，動作や声を意図的に交互に交わしあう（5～6か月） ・他者の行為を見てその場で模倣する等，新しい動作を模倣する（8か月～1歳） ・覚えていたものをあとになって，その場でなくても模倣をする（1歳1～3か月） <p>(2) イメージを表現する遊びを楽しむこと</p> <p>※イメージ：体験したことを思い浮かべる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みたて 例：直方体の積み木をつなぐように並べて電車にみたてる（1歳半） ・つもり 例：ままごとで食べているつもりになる（1歳半） ・ふり 例：泣いているふりをする（1歳半） 	<p>(1) 模倣ができるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなお遊戯・手遊びを楽しく見せて，その面白さに注目させる⇨観察学習や模倣学習を大切にする ・向かい合って手を取りあってお遊戯や手遊びを楽しむ（お手本を見せる人と子供の手を取って動作をさせる人がいると働きかけやすい） ・他者の歌や動作に合わせてお遊戯や手遊びをする楽しさに引き込むようにする <p>(2) みたて・つもり遊びを楽しめるようにする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積木などを使ってバスや電車にみたてて遊ぶ ・人形やままごとを使って，動作や仕草のまねをする遊びをする <p>※お母さんや他児と同じことをしようとする生活模倣を大切にする⇨観察学習や模倣学習ができると自発的な模倣が増えていく</p>
<p>4.動作を記号として使うようになってくること</p> <p>(1) 身振り言語</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ちょーだい」「ありがとう」「おはよう」「ばいばい」等の，身振りや仕草を理解して使う（8～11か月） <p>(2) 指さし</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指さす方向を見るようになる（7～9か月） ・興味・関心のある人や物を指さす（9～11か月） ・母親等の相手に共感を求めて指さす（9～11か月） 	<p>(1) 身振り言語を増やしていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大人が子供に「ちょーだい」「ありがとう」「おはよう」「ばいばい」等の身振りや仕草に言葉を入れて見せ，その意味が理解できるようにする ・お代わりをしたい時は皿を差し出す等，身振り言語で要求を表現できるように働きかける <p>(2) 指さしができるようにしていく</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供が興味を示している物を指さして「○○ね」と共感する ・子供が興味を持ちそうな物を指さして「○○よ」と言いながら一緒に見る（三項関係・共同

<ul style="list-style-type: none"> ・母親等の相手に要求をする（欲しい物，行きたい方向，してほしいこと）ために指さす（9～11 か月） ・母親等の相手に伝えようとして指さす（1歳～1歳半） ・問いかけに答えて指さす（1歳～1歳半） 	<p>注視）ことを大切にする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大人が生活の中で楽しく話しかけたり問いかけたりする手段として指さしを多く使うように配慮する ・子供の指さしに対して「○○ね」と答える等，指さしを介して共感しあったり交流しあったりすることを大切にする
---	--

表4 Stage I の重点課題

Stage I -1	Stage I -2	Stage I -3
<p>1. 各種感覚の発達および異種感覚の統合を促す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物を目で追う ・音源を見る ・皮膚刺激になれる ・物を吹く ・手の操作 ・身体の調節 	<p>1. 各種感覚の発達および異種感覚の統合を促す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目と手の協応 ・動作模倣 <p>2. 感覚運動的知能を養う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・隠された物を探す ・手段と目的の分化 <p>3. 対象指示活動の基礎をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指さし <p>4. 物に名称のあることの理解の基礎をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物の機能的な扱い ・弁別・分類 ・マッチング 	<p>1. 各種感覚の発達および異種感覚の統合を促す</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目と手の協応 ・動作模倣 <p>2. 対象指示活動の基礎をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指さし <p>3. 物に名称のあることの理解の基礎をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・弁別・分類 ・名詞の指示で物を取る ・名詞の指示で物を指さす <p>4. コミュニケーションの基礎を養う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常での言葉かけの理解

※出典 太田昌孝・永井洋子・武藤直子編（2015）自閉症治療の到達点第2版 日本文化科学社 p 141

IV 考察

言語獲得に必要な要素について検討をした結果，他者と意思や気持ちを通じ合わせることができるようになってくるためには，「共感性・疎通性，行為による対話（やりとり・やりとり遊び）」，物事の意味を理解することができるようになってくるには，「状況を理解することと物の意味を理解すること」，体験を思い浮かべて再現する表象能力を育てるためには，「模倣を楽しむこととイメージを表現する遊びを楽しむこと」，動作を記号として使うようになってくるためには，「身振り言語と指さしの各発達が必要になること」が示唆された。したがって，子供の発達段階を把握した上で，言語獲得に必要な関係の深い働きに目を向けた働きかけが大切になる。それらは，子供の全人間像を総合的に捉え，接近していくもの（村田,2016）であり，子供の発達や育ちを捉え，対象児の発達段階や状態像を把握したうえで働きかけることといえよう。

これらより，親子通園や単独通園における早期療育，障害児保育，特別支援学校や特別支援学級における特別支援教育等では，言語獲得に関係の深い働きに目を向けながら，言語獲得を促す働きかけをする必要がある。特に，重度知的障害や自閉スペクトラム症等発達障害があり，言語獲得がなされ

ていない子供に対しては、太田ステージ評価を活用し、Stage を明確にすれば、言語獲得に必要な適切な働きかけが容易になる。また、保育や教育の場が生活の場であることを考慮すると、生活の場において適切な働きかけをするために、今回得られた言語獲得に関係の深い働きと言語獲得のための働きかけを広く捉えた知見を活用することが有効だと推察される。

これまで、知的障害や自閉スペクトラム症等の発達障害がある子供に対して、音楽療法、言語訓練、スイミング等、さまざまな指導法が開発されている。親はそれぞれの指導・訓練の場で、子供の発達について説明を受けているのだが、トータルに子供の発達や育ちが捉えることができているかといえ、疑問が残る(小山・神土,2004)。また、他者への認知ができ上って来た時にはじめて、その人からの影響を自己の中に受け入れ、人間関係への道がひらかれてくる。適応能力が回復されてくる過程をもって療育効果と捉えられる(石井,2002)と論及されている。したがって、支援者には、子供の発達段階や状態像を捉えながら、受容的態度で言語獲得を促すことが求められる。

本研究では、1歳半未満の発達段階にある知的障害や発達障害のある子供が、言語を獲得するために不可欠な言語発達に関係が深い働きと言語獲得に必要な働きかけについて検討した。今後の課題は、今回得られた知見を、早期療育や保育、特別支援学校等での教育において活用し、言語獲得がなされていない知的障害や発達障害のある子供の言語獲得にどのように効果的な作用をするのかを明らかにすることである。

V 結 論

1歳半未満の発達段階にある知的障害や発達障害のある子供の言語発達に関係が深い働きと、言語獲得に必要な働きかけについて、子供の言語発達を中心に論じている文献の知見から検討し、その際、太田ステージ評価との関連も考慮した。その結果、①他者と意思や気持ちを通じ合わせることができるようになってくるためには、共感性・疎通性、行為による対話(やりとり・やりとり遊び)をする。②物事の意味を理解することができるようになってくるには、状況を理解することと物の意味を理解する。③体験を思い浮かべて再現する表象能力を育てるためには、模倣を楽しむこととイメージを表現する遊びを楽しむ。④動作を記号として使うようになってくるためには、身振り言語と指さしの各発達が必要になる。⑤太田ステージ評価を使用して言語獲得に関係の深い働きを考慮しながら、言語獲得に必要な働きかけを行う。⑥支援者は受容的態度で、子供の発達段階や状態像を捉えながら発達を促していく。以上の重要性が考察された。

謝 辞

本研究は、昭和 59 年に福岡市立心身障害福祉センター療育指導課において佐藤生子先生、米田博先生、北山仁美先生と行っていた早期療育研究会で得られた知見を踏まえて実施しました。記して感謝申し上げます。

引用文献

遠城寺宗徳(1977) 遠城寺式・乳幼児分析的発達診断検査表(九大小児科改訂版)。慶應義塾大学出版会。

石井哲夫(2002) 自閉症児の心を育てる—その理解と療育。明石書店。

小山正・神土陽子(2004) 自閉症スペクトラムの子どもの言語・象徴機能の発達。ナカニシヤ出版。

諸岡啓一(2005) 発達障害児の早期診断と早期介入について—言語発達遅滞の診断と早期介入。脳と

発達, 37(2), 131-138.

村田豊久 (2016) 新訂自閉症. 日本評論社.

中島雅史 (1991) 話しことばをもたないある自閉症児の言語獲得過程: コミュニケーション技能と生活技能の発達を通して. 聴能言語学研究, 8(1), 28-38.

太田昌孝・永井洋子・武藤直子編 (2015) 自閉症治療の到達点第2版. 日本文化科学社.

参考文献

※表2の通り

(2021年1月29日 受理)